

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	山内 優佳
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
<p style="text-align: center;">英語授業によるリスニング不安の変容 —自己評価活動を取り入れた授業を対象に—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	深 澤 清 治	
審査委員	教 授	中 尾 佳 行	
審査委員	教 授	築 道 和 明	
審査委員	教 授	松 見 法 男	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の目的は、(1) 学習者が外国語を聞く際に生じる外国語リスニング不安の要因を整理し、尺度の作成を行うこと、(2) リスニング不安とリスニング力の関係性を詳細に明らかにすること、(3) リスニング指導が学習者の外国語リスニング不安へ及ぼす効果を検証することの3点であった。</p> <p>第1章では、本論文の目的および背景を述べ、重要な用語を定義した。</p> <p>第2章では、外国語リスニングおよび外国語リスニング不安に関する先行研究を概観した。先行研究の成果としては、まず、外国語リスニング上の困難点、下位能力、指導法について、そして外国語リスニング不安と習熟度の関連や、不安低減法について、明らかになっていることを述べた。先行研究の限界点としては、既存の外国語リスニング不安尺度の不備、リスニング下位能力との関係の不明確さ、不安低減法として問題解決的アプローチの不足を指摘した。以上の限界点を受け、以下3点を研究課題として設定した。</p> <p>(1) 学習者が外国語リスニング時に抱く不安はどのような要因で構成されるか。  (2) リスニング不安とリスニング力の間にはどのような関係があるのか。  (3) 英語リスニング指導によって、リスニング不安はどのように変容するのか。</p> <p>第3章のうち第1節では、1つ目の研究課題に答えるべく、既存の外国語リスニング不安尺度を修正し、学習者の不安の要因を特定するための改訂版尺度を作成した（調査1）。質問紙調査と分析の結果、18項目からなる質問紙が完成した。また、リスニング不安は6因子（因子A1「実生活におけるリスニング」、因子A2「学習場面におけるリスニング」、因子B1「学習者の不十分な知識」、因子B2「テキストの難易度」、因子C1「ボトムアップ処理」、因子C2「メタ認知的活動」）から構成されることが明らかになった。第2節では、2つ目の研究課題に答えるべく、各不安因子とリスニング能力を構成する下位能力との関連を調査した（調査2）。質問紙調査と5種類のリスニングテストから、特に、因子A2とC1が、単語認識能力など多様なリスニング下位能力と負の相関関係にあり、因子C2は、音変化の認識と負の相関関係にあることが明らかになった。この結果により、単語認識能力や音変化の認識能力は、不安と関連が強いリスニング上の問題になりうること、そしてこれらの能力に焦点を当てたリスニング指導により、不安が低減することが示</p>			

唆された。

第4章では、研究課題の3つ目に答える調査が実施された。第1節では、音声による単語認識能力と音変化の認識能力に注目し、英語授業におけるディクテーション活動導入によるリスニング不安の変容を調査した(調査3)。全体的傾向として、各因子における平均値からは大きな変動が確認されなかった。一方で、個々の調査協力者の結果には、因子ごとに異なる傾向が見られた。具体的には、特に因子A2, C1, C2においては、不安が増した者と低減した者が存在した。本調査の課題として、(1) 調査対象者が少ない点、(2) 統制群が設定されていない点、(3) 不安が強い因子B2に低減がみられない点、(4) 変化に個人差を生じさせた要因が考慮されていない点が指摘された。第2節では、自己評価活動導入による、不安の変容を調査した(調査4)。調査4においては、調査対象とする不安の因子をA2, B2, C1の3因子に限定し、また、介入を実施する期間に先立って、介入を行わないベースライン期を設けた。全体的傾向としては、ベースライン期よりも介入期における平均値の変動が大きく、不安の低減が生じた対象者数が多いという結果になった。因子A2に対しては、授業内の活動について自己評価が高く、また、自由記述に教員の助言が反映されている学習者群で、不安の低減が確認された。因子B2に対しては、習熟度が比較的低い学習者群で不安の低減が確認され、問題解決的アプローチの効果を示す結果であると考察された。因子C1に対しては、自己評価がやや低い1つの学習者群にのみ不安の低減が確認され、リスニングを困難にしている原因が明確化されたことによる効果であると考察された。

第5章では、本論文の成果と課題をまとめ、以下2点の教育的示唆を示した。

#### (1) 改訂版外国語リスニング不安尺度の診断的活用

調査1で作成された尺度を活用することで、授業開始前に学習者が抱く外国語リスニング不安の要因、ひいては学習者が外国語リスニングにおいて苦手とする下位能力を診断的に評価することができる。

#### (2) 問題解決的アプローチによる不安低減

診断された不安の要因(下位能力や材料の特性)を避けるのではなく、授業に組み込むという、リスニング上の問題の解決に焦点を当てたアプローチにより、外国語リスニング不安の低減を図ることができる。また、より明確に困難点を言語化するために、音声や言語に関するメタ言語を導入することの効果が期待できる。

本研究は、次の2点において高く評価することができる。

#### (1) 外国語リスニング不安の理論を発展させた点

既存の尺度で測定される外国語リスニング不安の構成要素の曖昧性を指摘し、改善を加えたことは、当該分野における今後の研究を支える功績である。

#### (2) 問題解決的アプローチにより不安低減を試みた点

授業内において、知識の伝授や技能の育成に指導の焦点を置きながら不安の低減を試みたことは、教育現場を対象とした不安研究、および実践の前進に資するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月12日

